
3年Z組銀八先生（体育祭編）

近衛 陸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3年Z組銀八先生（体育祭編）

【Nコード】

N3752X

【作者名】

近衛 陸

【あらすじ】

銀魂高校での体育祭。

3年Z組は優勝を目指して頑張るが悲劇が起こる。
無事に1日を過ごせるのか……

午前の部

今日を無事に過ごせるんだろうか…と志村新八は思うのだった。

銀魂高校のグラウンドに立ててある3Z応援テントの中に新八は居た。周りには殺気と熱気と闘志で満ち溢れたクラスメートたちが体操服姿で気合いを入れている。

そう、今日はこの銀魂高校の体育祭なのである。

3Zの連中は勉強が苦手ではあるが、その分身体的能力が半端ない奴らが多い。体育祭はいわば3Zの祭りのようなものだ。

それに加えて…今回はバカ校長…じゃねえや、ハタ校長が優勝した組に『焼き肉食べ放題券』をあげるつと言ったのだ。

あの肉好き猛者達がそれを聞いて黙っているわけ無い。

いつも以上に張り切っている。そう、下手したら怪我人が出るのではないかというくらい。

新八はそんな風に不安に思っていた。その時…周りがザワザワと騒がしくなった。どうやら、第一種目のリレーが始まったようだ。

出るのは沖田に土方…そして近藤の風紀委員メンバーである。

まず最初に沖田が走った。沖田が走るとあちらこちらから黄色声援が聞こえてくる。

「ケツ…どこがいいアルか！！あんな奴」

神楽は眉を寄せてきっぱりと言った。そんな神楽に新八は苦笑いをして言う。

「仕方ないよ、神楽ちゃん。沖田さんは性格はやバいけど顔は良いもの」

新八の言葉に神楽は眉を寄せた。すると今度は土方が走り始めた。土方が走り出すと再度黄色声援が聞こえてくる。

「ケツ…あんなマヨのどこが良いんだよ!!」

実は隣に居た銀八が神楽と同じように呟いた。先生あるまじき言葉である。

「先生…」

新八は呆れたように銀八を見つめる。するとそばにいたお妙が不思議そうに首を傾げる。

「あら？先生…いいんですか？こんな所に居て」

「先生、サボリアルか？」

お妙の言葉に神楽も首を傾げて聞いた。そう教師は体育祭の間色々と仕事があり忙しいのだ。

「あ？ちげえよ。第二種目の玉入れに出る奴に準備しろって言いに来たんだよ」

銀八がきつぱりと言うと神楽とお妙が立ち上がった。すると黄色声援がいきなり途絶えた、どうやら次は近藤が走るようだ。

近藤は静かなグラウンドを走った、もちろん33は一位である。近藤は今から33の応援テントの前を走るようだ。

「お妙さん!!あなたに一位を捧げます!!何故ならお妙さんに

は…」

近藤は走りながらデレデレとお妙の元へやってきた。そして立ち止まりお妙への想いを語り出した。もちろんその間に二位に抜かされた。お妙はプルプルと震える。

「やや、お妙さん。そんなに感動して…ブギヤラア」

「いいからサツサと逝けやアアアア!!」

お妙は近藤を思い切り殴った。近藤はもうスピードで飛ぶ…そしてそのまま一位でゴールテープを切った。3Zのクラスメートたちは一位でゴールしたことに喜ぶ。しかし先程まで一位だったクラスは流石に納得出来ないようだ。

「待ってよ!!さっきのは無効だろ!!」

「そうだ、反則だ」

「そうだ、そうだ!!」

ギヤーギヤーと文句を言う生徒たちにお妙は振り向いた。

「あ、あ? テメエ等も逝きてえのかゴラ?」

『す、すいませんでしたアアアア!!』

一クラス全員がその場に土下座した。他のクラスも青ざめている。

「さあ、銀八先生。そろそろ行きましようか?」

「へ?...え?...あつ、はい」

お妙に突然話しかけられてはビクビクとする銀八。ちなみに新八は苦笑いを浮かべ、神楽は...流石姉御ネ!!!と嬉しそうにしていた。

さてさて、お次は第二種目玉入れである。本来玉入れとはカゴに玉を入れてその数を競うのだが、この銀魂高校は一味違うようだ。

「よし。みんな、やってやるわよ!!!」

『オオー!!!』

お妙が言つと他の出場選手も元気よく拳を上げた。するとタイミング良く音楽が流れ出した選手入場の音楽だ。

「第二種目!!!銀魂高校ならではの玉入れが始まりました。今年はどうなるんでしょう?...むさしさん」

「食える時に食つとかないとね」

何故か第一種目の時に居なかつた。司会者&ゲストのむさしに似た人が喋り出した。それを合図に玉入れは始まつた。

「それにしても...この勝負怪我人が出ると噂なんですけどどうなんで

しょう」

「食べる時に食つとかないとね」

「そうですね。確かにそうです…と…おおっと開始早々組の力が気が絶…！組失格です」

司会者の言葉がグラウンドに響き渡った。

さて、読者の皆さんは不思議に思っているであろう。カゴが気絶とはどういふことなのだろうと…

実はこの銀魂高校の玉入れは他とは違い、一人の生徒がカゴを頭の上に持ち、残りの生徒がそのカゴに玉を入れるという感じになっていた。

つまり、カゴを持った相手を倒せばそのチームは競技不能になってしまう。

「ぶわっははは！！ちよろい。ちよろいアルなア」

「うふふ…ごめんなさいね」

「これもお妙ちゃんのため。すまない」

神楽とお妙と九兵衛は笑いながらカゴの相手を倒して行く。

「凄い！！凄い！！3人メンバー。もの凄い勢いで他のクラスのカゴを倒していつてます。ってかお前らきちんと玉入れしろオオオ！！」

大興奮の司会者の言葉を聞きながら九兵衛はふと疑問に思いお妙を

見た。

「時にお妙ちゃん…3Zのカゴは守らなくても大丈夫なのか？」

そう、実は3Zは攻めはするのだが一切守ってなかった。お妙がその質問に答えようとすると司会者が再度興奮したようにしゃべり出した。

「あっ…ああー！！あまりの3Zのすごさに他のチームが団結！！団結して3Zのカゴに向かって行きました！！」

「お妙ちゃん、まずいカゴが！！」

司会者の言葉に九兵衛は慌てて言った。しかし、お妙はにっこりと微笑み3Zのカゴを指差す。

九兵衛はそんなお妙を見る、そして3Zのカゴを見て驚愕した。

「あ、あれは…！？」

九兵衛の声に重なるように司会者がしゃべりだした。

「おーおっと…これはどういうことでしょう。3Zのカゴまで行った選手が顔を青ざめ謝りながら自分のチームに帰って行きます！！」

司会者の言葉通り、3Zのカゴに向かった生徒はブルブルと震えながらチームに帰って行く。

しかし、その中にも一人は無謀な空気の読めない奴が居るようだ。

「お前ら、情けないな！！俺がやってやるよ」

そう、空気の読めない男。D組の斎藤高春くん。斎藤くんは…同じくD組の松本由香里ちゃんに恋をしているのだ。そして、その由香里ちゃんに良い所を見せようと頑張っている。

斎藤くんは震えながらも3Zのカゴに向かって玉をぶつけた。

「ひいっ」

なんとZ組のカゴはビビるようにカゴと頭を手で押さえしやがみ込んだ。それを見た斎藤と震えていた生徒はニヤリと笑う。どうやら3Zのカゴの人物は外見が恐ろしいだけで中身はそうではないらしい。

「よし、みんな行くぞ」

斎藤は大きく声を張り上げ他の生徒を率いて3Zのカゴに向かって走った。勢いをつけて倒す気のような。斎藤は走りながら自分のクラス応援席にいる由香里に視線を一度向ける。

(由香里ちゃん、見ててこの俺の活躍を!!)

斎藤は由香里に視線を送りながら心の中で呟いた。そして3Zのカゴを睨みつけた。

「これでもくらえぶらアアアアッ!!」

斎藤が投げるため足をもう一歩踏み出そうとしたその時である、突然の衝撃が起こり斎藤の身体を吹っ飛んだ。そしてバトル漫画のように地面に2、3回跳ねながらつき、そして動かなくなった。

他の生徒たちは驚いた。自分たちの前に居た斎藤が突然横へと吹っ

飛んでいったのだから……

しばらくシーンとした空気が流れる。周りは何が起こったのか分からない。

そんな空気を最初に壊したのは3Zのカゴの人物である。3Zのカゴの人物は斎藤が立っていた場所の近くに行くとしゃがみ込んだ。そして、自分の手に動く何かを乗せて立ち上がる。

「危ないところだった。体育祭ではしゃぐのはいいのですが……テントウ虫を踏んでしまうところでした。殺生はいけない」

3Zのカゴの人物……いえ、もう皆さんはお気付きでしょう。屁怒組は残った生徒たちを見渡すとキラリッと瞳を光らせた。

『ギヤアアアアア!!』

他の生徒たちは泣き叫び3Zのカゴから離れていった。

さて、そのようなことがあり玉入れは3Z以外競技不能で終わった……。
それから何個か競技を終えて午前の種目は終わったのであった。

昼食（前書き）

明けましておめでとございますー！！

やっと復活です。今年度もよろしくお願いしますー！！

昼食

さて、午前の種目が終わると皆が待ちに待った昼食である。生徒たちは嬉しそうにブルーシートに座るとお弁当を取り出した。もちろん3Zの生徒たちもである。

「私、お腹ペコペコネ」

「まあ、神楽ちゃんったら」

神楽の嬉しそうな様子にお妙は口に手を当てクスリと笑う。そんな二人？のもとへ九兵衛がやってきた。手には大きな重箱を持っている。

「お妙ちゃん、僕も一緒に食べてもいいかな？」

「ええ、もちろんよ。九ちゃん」

お妙はにっこり笑うと座るのを進めた。

『いただきまーす』

三人？は嬉しそうに弁当をかけて食べだす。

「それにしても外で食べると美味しいですね、姉上」

突然の声にお妙は目を見開いて驚き、神楽と九兵衛も食べるのを止めた。

「きゃあ、新ちゃんったらいつから居たの？」

「ほんとネ、いつから居たアルか？」

驚きながら言う二人に新八は眉を寄せた。

「いや、いつからって……最初っからここに居ましたけど」

「マジアルか？気づかなかったネ」

「ほんとよ、ナレーションにも気付かせないなんて……新ちゃん立派になったわ」

神楽の言葉にお妙も感心したように言った。そんなお妙に新八は驚いたように言う。

「えっ？姉上……ナレーションって？いやいや、嘘でしょう？そんなわけないですよ」

新八は笑いながらナレーションの言葉を見に行った。そして確かにナレーションの言葉は人数が足りなかった。

「う、嘘オオオ！！ちょ、僕そんなに存在感ないですかアアア！！」

「新八くん。落ち着くんのだ。よく見たらアレ……ナレーションは人数の後に？を付けている。もしかしたら気付いてたんじゃないか？」

「そ、そうですね。そうですね……！！」

九兵衛の言葉に新八はうんうんと頷いた。しかし二人は知らない……いや、ナレーション以外は知らない。人数の後ろについている？は神楽の連れているペット定春のことなのだと、ナレーションは迷ったのだ。定春は人では無いので人数で数えるのは可笑しいと。だが、あの状態で2人と1匹と言うのもなんか違和感がある……だから？にしたのだ。

そのような出来事も知らず新八は気付かれたと勘違いして嬉しそうにしている、仕方がないのでナレーションは気付いていたことにしてやろうかと思っただけどやめた。

「ちよつと！！なんでやめるんですかッ！！」

新八が突っ込むもナレーションはもちろん無視だ。するとお妙が口を開いた。

「まあ、そんなことは置いといて早く食べましょう。この日のために私たくさん作ってきたんだから」

「姉上。弟の存在感についてのことをそんなことって……って、え？姉上今なんて」

お妙の言葉を新八は聞き返した。なにやら聞き捨てならないことが、聞こえたのだ。

「なんてって……早起してたくさん作ったのよ。いつもの2倍は美味しいわ。さあ、召し上がれ」

お妙は取り出した重箱の箱を開ける。箱の中には……可哀想な焼けた卵ダイクマターが箱いっぱいに入っていた。いつもより威圧感が2倍である。

新八と神楽は顔を真っ青とした。九兵衛はと言うとお妙の作った物は何でも食べるといった感じに重箱のダークマターへと手を伸ばす。そしてガリボリっと一口食べた。

「うん。妙ちゃん、とってもおいグハッ」

「ああ、流石はお妙さグフッ」

九兵衛といつの間に湧いてきたのか近藤はダークマターを持ったまま大量の血を口から吐いて倒れた。

「九兵衛さあああん！！っていつの間に近藤さん現れたんですか！！」

「九ちゃんとゴリラアア！！」

新八と神楽慌てて近寄るも残念ながら九兵衛と近藤は起きることがなかった。どうやら、威圧感どころか威力が2倍になっているようだ。

「まあ、2人もあまりの美味しさに昇天しちゃったのね。ほら、新ちゃんと神楽ちゃんもお食べなさい」

お妙はにっこりと微笑みながらダークマターを進めてくる。新八と神楽は顔を真っ青にして口々に言う。

「姉上！！僕弁当たくさん食べたんでもうお腹いっぱいです！！」

「姉御私もお腹いっぱいヨ！！」

「あら、そうなの？じゃあれどうしようかしら」

お妙が困ったように言うと神楽が口を挟んだ。

「姉御！あれアル。私たち体育祭とはいえ玉入れの時他のクラスに迷惑かけたヨ。お詫びにその卵焼き持って行くなんでどうアルか？」

「え？ちよ、神楽ちゃんそれは……」

神楽の言葉に新八はたしなめるように口を開いた。しかし、次の瞬間神楽の発した言葉に新八はきつぱりと言った。

「じゃあ、新八が食べるアル」

「あ、姉上エエエ！！僕も、僕も神楽ちゃんの案に賛成です！！」

「あら、そう？じゃあちよっとなってくるわね」

お妙がダークマターを持って他のクラスに向かうと2人はほっと息をついた。

しばらくすると他のクラスの人たちの断末魔とたくさんの救急車が向かってくる音がグラウンドに響き渡ったという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3752x/>

3年Z組銀八先生（体育祭編）

2012年1月4日10時47分発行